

# 羅振玉撰・内藤湖南書〈蔣輔墓誌銘〉をめぐる

——蔣輔を中心に三人の交友について——

石 田 肇  
(社会科教育講座)

一

小稿では羅振玉(一八六六—一九四〇)、湖南内藤虎次郎(一八六六—一九三四)そして蔣輔(一八六六—一九一一)なる人物、彼ら三人の交友について、蔣輔を中心に述べておくことにしたい。蔣輔は辛亥革命が始まった直後に没しているので、対象となる時期はほぼ彼の没年までということになる。

羅振玉と内藤湖南の両者について贅言する必要はないが、蔣輔は従来ほとんど注目されたことのない人物である。筆者は十数年前、蔣輔の墓誌銘のいわば影印を入手した。羅振玉が撰文し、内藤湖南が書丹・題蓋したものである。おそらくは墓誌銘を刻す前に内藤湖南の肉筆を影印して、蔣輔の一族が関係者に配布したものであろう。某古書肆にあつたひとまとまりの中国の拓本のなかから選んだものであること、また紙質からしても、これは中国で印刷されたものと推測される。そ

の後、時折、蔣輔のことを考えていたのであるが、今夏、この墓誌銘の影印を展示する機会があつたので、近代の日中文化交流の一齣として小稿をまとめる気持ちになつた次第である。またこの影印は書家としても著名な内藤湖南の書を考えるうえでの資料となりえよう。

蔣輔についての詳しい資料はないようであるが、纏まつた伝記としては件の墓誌銘があり、これは羅振玉の全集である『羅雪堂先生全集』(以下『全集』)初編第一冊所収の『永豊郷人稿』の「甲稿 雲窗漫稿」に「学部候補郎中二等諮議官蔣君墓誌銘並序」として見えるものである。この墓誌銘はまた『碑伝集補』巻五二に録文されているが、墓誌銘の影印とこの両者の間には微妙な違いがあり、この点については次節で説明することにする。この他に民国八年の『金石学録統補』上巻、民国二二年『吳県志』巻六六下に伝があり、また『汪康年師友書札』(上海古籍出版社 一九八六年)の各家小伝にも伝がある。蔣輔の字は伯斧であるが、羅振玉の孫の羅継祖が著した羅振玉の伝記である『庭聞憶略』(吉林文史出版社 一九八七年 以下『憶略』)八頁では初字

は觀展で、後に伯斧に改めたという。また後述のように蔣黼は蔣斧と著名することもある。黼と斧は同音である。<sup>(註一)</sup>

蔣黼・羅振玉そして内藤湖南は同じ寅年の生まれであり、そのうえ蔣黼と羅振玉はともに江蘇省の淮安の人である。正確に言うならば、羅振玉の本貫は浙江省の上虞であるが、数代前から江蘇省の淮安に住んでおり、蔣黼もまた本貫は江蘇省の呉県<sup>(註二)</sup>であるが、父の代から淮安に住むようになり、ともに淮安の人といつてよい。二人がいつ頃から知り合ったのかは未詳であるが、『憶略』の八頁と一五五頁で、墓誌銘の「夫れ予、君と交わること二十年に垂んとす。出処ともにし、方め淮安の寓居にありては、過從虚日無く、海上(上海のこと)の居に在りては舍を比べ、日に數しば見みゆ。当世の賢達、人材を以て予に詢わば、必ず首づ君を挙げ以て応ず。故に予、粵中に客たりしとき、呉下に客たりしとき、皆な君と偕にし、出づれば則ち軫を連ね、居れば則ち席を接す。君、京師に来るに及んで、余が家に主たること半歳、而して拙宦も亦た類す」という一文を引いて、羅繼祖は羅振玉の交友のなかで蔣黼との関係が一番親密であったとしている。二十年に近い交友であったということからすれば、一八九〇年代はじめには両者は親しかったことになるが、後述のように光緒十年(一八八四)にまで遡るかもしれない。

ともあれ蔣黼と羅振玉の交友は淮安にあつても、上海にあつても、そして広東や江蘇、ついで北京にあつても深いものであつた。常に二人は連れ添うように行動していたことになる。蔣黼に関する資料は少

なく、それゆえ小稿では羅振玉関係の史料を中心に蔣黼についてみてゆくことにするので、それらの主なものを説明しておく、まづ羅振玉自伝の『集蓼編』(一九三一年序 『全集』続編第二冊)が基本であり、年譜には莫榮宗「羅雪堂先生年譜」(『大陸雜誌』第二六卷第五、第八期原載 『全集』初編第二〇冊)がある。身内が書いた伝記ではあるが既にあげた『憶略』とともに羅繼祖には『永豊郷人行年録』(中文出版社 一九九〇年 以下『行年録』<sup>(註三)</sup>)がある。<sup>(註四)</sup>小稿はほぼこれらと前掲の蔣黼関係の史料を中心に記述し、異同のある場合や問題のある場合には出典を示すが、そうでなければ煩雑になるので基本的には出典は示さないことにする。

## 二

本節では件の墓誌の蓋と墓誌銘の影印(以下、影印)を紹介することにする。図Iは蓋の影印で、図IIは誌石の影印である。ともに内藤湖南の謹直な楷書で書かれている。それぞれの紙の大きさは、蓋は縦六九・七×横五七・二(単位はセンチメートル)、誌石は六九・五×五八・〇である。蓋の書丹の部分の大きさはつまり野線の部分全体の大きさは三七・七×三八・二であり、各字は七・五×七・五の野線で区切られている。誌石の書丹の部分の大きさは四五・〇×四五・六であり、一字一字は一・五×一・五の野線で区切られている。誌文は三十行、行三十字で

皇	政	候	等	府
清	大	補	詔	君
誥	夫	郎	議	墓
授	學	中	官	誌
奉	部	二	蔣	銘

〔図 1〕

皇清誥授奉政大夫學部候補郎中二等誥議官蔣君墓志銘并序

日奉京都帝國大學文科大學教授文學博士內藤虎次郎書丹并題蓋

宣統三年冬武漢兵起京師一日數驚吾支學部郎中蔣君適以是時卒於京

邸明年春既葬君之棺尚居於京畿之南郊予作書從君之弟克家乃以秋

八月歸君喪於江南又明年以葬期告且乞鍾幽之文予與君交深且久義不

可以辭君諱翰字伯斧江蘇吳縣人曾祖元甄郡文學祖錫寶道光甲辰進士

淮南府學教授並以儒行著稱當時父清湘浙江武義縣知縣以淹雅之才出

宰百里君自幼冲隨侍官舍早聞詩禮兼明吏事既游鄉學武義君令試吏於

鄂中非所好也及武義君以老疾去官卜宅淮安君適有期功之喪乃歸侍養

武義君卒服闋不復出侍母錢太恭人閉門誦習色養蒸二既而感傷時危思

所以拊濟之念農為邦本乃與予結學農社於海上以講求本富之術不逾年

以慈母歸又數年入資為郎然不以仕廢養仍初志也及學部肇造旁求俊乂

予稱君學行於尚書蒙古祭公並逆書勸君期以及時達白君乃翻然應召意

或藉展尺寸乃卒以與世擊杓浮湛以死君既淵靜好書靡學不綜京師立大

學君以小學授諸生莫不翕服性願儒緩撰述矜慎厲草多不及半予每以督

君輒遜謝不能改也故卒無成書嗚呼進不得行其志退未能竟其學是豈君

之命也夫子交君垂二十年出處與共方在淮南寓居過從無虛日在海上海

比舍日數見當世賢達以人才詢予者必首舉君以應故予客粵中客吳下皆

與君偕出則連軫居則接席及君來京師主于家者半歲而拙宦亦類予羞世

雷同不為苟合束脩守道不闕權門行日進於古人而與世彌遠矣嗟手足之

辰母喪未除弱女在抱孀妻穉妾傑然涕泣於喪次吊者莫不哀之然予之所

以哀者則更在彼而不在此也君生於同治而與予齊齒其卒也得年四

十有六初娶陳氏繼室程氏側室氏女子一以君弟克家之子慰祖嗣今將

以癸丑十二月殯於武義君之塋側定安有期百年長畢予避地海外不獲執

紼送君長往嗚呼嫁君阿鷺乃驗疇昔之言真以生留未卜歸來之日既傷逝

者亦自悲也銘曰

矣矣蔣君實邦之秀世濁行芳德隆位賤早歲幼學壯年作掾目擊橫流心悲

積霰尺驥未展兩楹已奠衰絰入棺桑海俄變傷哉道溺誰與手援君往不復

我生安道

(四二)

〔圖三〕

1 學部候補郎中二等諮議官蔣君墓誌銘 并序  
 宣統三年冬武漢兵起京師一日數驚吾友學部郎中  
 蔣君適以是時卒於京邸明年春既鼎革君之棺尙厝  
 4 於京畿之南郊予作書促君之弟克家乃以八月歸君

喪於江南又明年以葬期告且乞薤幽之文予與君交  
 7 深且久義不可以辭君諱黼字伯斧江蘇吳縣人曾祖  
 元甄郡文學祖錫寶道光甲辰進士淮安府學教授並  
 9 以儒行著稱當時父清翊浙江武義縣知縣以淹雅之  
 才出宰百里君自幼冲隨侍官舍早聞詩禮兼習吏事  
 11 既游鄉學武義君合試吏於鄂中非所好也及武義君  
 以老疾去官卜宅淮安君適有期功之喪乃歸侍養武  
 義君卒服闋不復出侍母錢太恭人閉門誦習色養蒸  
 13 蒸既而感傷時危思拯濟之以農爲邦本乃與子結學  
 農社於海上以講求本富之術不逾年以戀母歸又數  
 16 年入資爲郎然不以仕廢養仍初志也及學部肇造旁  
 求俊又予稱君學行於尙書蒙古榮公並移書勸君期  
 18 以及時建白君乃翻然應召意或藉展尺寸乃卒以與  
 世鑿柄浮湛以死君淵靜好書靡學不綜京師立大學

墓甲

五

19 君授六書倉雅之學諸生莫不翕服性顧儒緩著述矜  
 慎屬草多不及半子每以督君輒遜謝不能改也故卒  
 無成書嗚呼進不克行其志退不能竟其學是豈君之  
 命也夫子交君垂二十年出處與共方在淮安寓居過  
 21 從無虛日在海上居比舍日數見當世賢達以人才詢  
 22 子者必首舉君以應故子客粵中客吳下皆與君偕出  
 則連軫居則接席及君來京師主子家者半歲而拙宦  
 亦類予羞世雷同不爲苟合束脩守道不闕權門行日  
 28 進於古人而與世彌遠矣啟手足之辰母喪未除弱女  
 在抱孀妻稚妾儼然號泣於喪次弔者莫不哀之然予  
 之所以哀君者則更在彼而不在此也君生於同治丙  
 寅與子齊齒其卒也得年四十有六初娶陳氏繼室程  
 氏側室某氏女子子一人以君弟克家之子慰祖嗣今  
 31 將以癸丑十二月殯於武義君之塋側窀穸有期百年

37 長畢子避地海外不獲執紼送君長往嗚呼嫁君阿鵞  
 乃驗疇昔之言奠以生芻未卜歸來之日旣傷逝者亦  
 自悲也銘曰  
 奠矣蔣君實邦之彥世濁行芳德隆位賤早歲劬學壯  
 年作掾目瞿橫流心悲積霰尺驥未展兩楹已奠衰經  
 入棺桑海俄變傷哉道溺誰與手援君往不復我生安  
 遣

ある。

まづ蔣黼の墓誌銘が羅振玉によって撰文され、内藤湖南が書丹した経緯をみておくことにしよう。一九一一年、辛亥革命が勃発すると、羅振玉は内藤湖南、狩野直喜や富岡謙蔵の勧めを受けて、当時、北京にいた藤田豊八に相談したうえで、北京から天津經由で日本に亡命し、京都に住むことになる。一方の蔣黼は革命直後に北京で急死してしまう。『行年録』四四頁では時疫つまり流行病とし、また一九一八年に羅振玉は蔣黼のことを思い出しながら書いた『王子安集佚文』（『全集』初編第三冊）の序文では「辛亥之秋矣、伯斧又卒以暴病卒」とある。墓誌銘によれば、一九一二年、遺体は北京の南郊に安置されており、羅振玉は蔣黼の弟の克家に手紙を書いて促したところ、八月に遺体は江南に戻ったという。翌一九一三年、葬儀の期日が知らされ、墓誌銘撰文の依頼があった。そして墓誌銘に「癸丑十二月殯於武義君之塋側」とあり、十二月に父の墓の横に葬られたのであった。江南に戻ったというのだから本貫の呉県とも考えられるのだが、「殯」と記していることからすれば、あるいは父子ともども淮安に葬られたのかもしれない。墓誌銘の依頼を受けた羅振玉は蔣黼との交友からして当然撰文をするのだが、書丹を誰に頼むべきか考えたことであろう。京都にいた彼にとって、蔣黼を知る中国人に頼むのは難しかったのかもしれない。ところが内藤湖南は書名も高く、かつ後述のように彼は蔣黼と既知の仲で同年でもあり、そこで書丹は内藤湖南に依頼されたと推測されよう。内藤湖南はこの書丹についてなんら記録を残していないようなので、

彼の心中を推測するにすぎないが、中国人の墓誌銘を書丹することなどはなかなかない機会であり、かつ蔣黼を知っているのだから、墓誌銘に関する彼の蘊蓄を傾けて書丹にあたったと推測しえよう。<sup>註五</sup>

図IIIは『全集』の『永豊郷人稿』に見える墓誌銘である。『全集』本は羅振玉の庚申（一九二〇）六月二十七日の序文がある胎安堂刊本を影印したものである。また民国十二年（一九二三）に出版された『碑伝集補』は「皇清誥授奉政大夫学部候補郎中二等諮議官蔣君墓誌銘 羅振玉」として墓誌銘を録文している。影印には「皇清誥授奉政大夫学部候補郎中二等諮議官蔣君墓誌銘并序」とあるが、図III第一行はすこし簡略な表現になっており、『碑伝集補』では「并序」がない。図IIIと図II、そして『碑伝集補』を比較すると何ヶ所かで文字の異同がある。そこで図IIIには1から37までの該当個所の行数を示してあるので、三者を比較すると次のようになる。

1	(既述)	(既述)	(既述)
4	以八月	以秋八月	図IIに同じ
7	淮安府学	淮南府学	図IIに同じ
9	習吏事	明吏事	図IIに同じ
11	君適有	図IIIに同じ	〈君〉なし
13	拯濟之以	所以拊濟之	図IIに同じ
16	移書	遂書	図IIに同じ
18	君淵	君既淵	図IIに同じ(君既淵)

19	授六書倉雅之學	以小學授	図IIに同じ
19	著述	撰述	図IIに同じ
21	不克	不得	図IIに同じ
22	淮安	淮南	図IIに同じ
28	稚妾	穉妾	図IIに同じ(穉妾)
31	室某氏女子一人	室氏女子一	図IIに同じ
37	兩楹已奠	図IIIに同じ	兩楹已奠

このようにみると、十五ヶ所にわたって文字の異同があることとなる。「永豊郷人稿」に誤植のある可能性もあるが、基本的には一九二三年に刊行された「碑伝集補」は影印と同じであり、一九二〇年に刊行された「永豊郷人稿」によっていないといえる。つまり影印によっていると判断され、影印は「碑伝集補」の編纂者にわたっていたと考えられよう。影印と「永豊郷人稿」の異同の中で、七行目と二二行目の淮南と淮安については後述のように「呉県志」によって「永豊郷人稿」が正しいと判断され、内藤湖南の書き誤りということになる。その他は概ね文意は同じであるが文字が異なるだけであり、内藤湖南は羅振玉の文章に手を入れたわけである。とはいえ一九二〇年に刊行された「永豊郷人稿」は影印とは異なるのであるから、羅振玉は自分の文章としては「永豊郷人稿」の方を取ったと理解できよう。僅かな文字の異同にすぎないが、両者の異同は注目すべきものであり、一九行目の「六書倉雅之學」を内藤湖南が「小學」と短くしたのは表現のうえで優れているといえよう。三一行目は「永豊郷人稿」の誤植の可能性が

あるが、内藤湖南の文章の方がすっきりとしている。尚、「呉県志」の列伝は墓誌銘によっているとするが、列伝は文章もかなり短く、後述のように墓誌銘にあがっていない蔣黼の著作をあげており、比較の対象とはなりえない。ただ「明吏事」としてるところからすると、「呉県志」もまた影印によっていると考えられよう。

### 三

本節と次節では蔣黼・羅振玉・内藤湖南の交友について時系列を追ってみてゆくことにしたい。本節では蔣黼と羅振玉の若年時、蔣黼の父清翊のこと、上海時代までを記しておくことにする。

まづ蔣黼の家系であるが、前述のように呉県の人である。曾祖父の元甄は郡文学であり、祖父の錫宝は道光庚辰(一八四四)の進士である。光緒「呉県志」卷一三の選舉志によると、字は崧生で、淮安府教授になったとある。父の清翊、字は敬臣の代になって淮安に住んだのもこのような縁によっているのかもしれない。父は浙江省武義県の知県の経験があり、蔣黼は幼少の頃より官舎に随侍したというのだから、あるいは父の任地で生まれたのかもしれない。父の任地で学問に励み、墓誌銘には「武義君令試吏於鄂中、非所好也。及武義君以老疾去官、卜宅淮安」とある。一般に「試吏」とは科挙受験と考えられるので、清翊が湖北省に任官していた折、蔣黼に受験させようとした、という

意味なのであろうか。ともあれ蔣黼は好まなかったのであった。「金石学録続補」では光緒戊子（一八八八）に挙人になったとし、「憶略」一五四頁では郷試に及第したが、父が没したので淮安に住み読書と母親を養う日々だったとする。一方、「呉県志」選挙志の挙人には蔣黼の名は見えない。また淮安に住むようになった時期についても、墓誌銘は父が官を止めてからとするが、「憶略」は父の没後とする。蔣黼の科挙受験、淮安に住むようになった時期に関しては未詳とせざるをえない。後述のように清翊の『唐王子安集注』は光緒九年（一八八三）に刊行されているので、この時期には淮安に住んだと考えてよいだろう。

ここで蔣黼の父清翊について記しておくことにしたい。清翊がどの程度に学問があつたのかはわからないが、金石学や文学に関心があつたといえるし、相応の資産もあり、蔵書もあつたようであり、蔣黼は父の学問と資産を受け継ぎ、羅振玉もまた清翊から恩恵を受けているのである。まづ清翊の編集した書物に『支遁集補遺』一卷（邵武徐氏叢書）がある。これは晋の釈支遁の文集の補遺であり、各種の書籍から佚文を編集したもので、同治甲戌（一八七四）の清翊の跋文がある。また光緒九年（一八八三）には呉県蔣氏雙唐碑館から唐の王勃の文集に清翊が註を施した『唐王子安集注』二十巻を刊行している。この書は考証精密で多くの文を集録し優れているとされており、第二十巻の卷末には「蔣黼校字」とあって、蔣黼が校字という形で出版に関係していることが解る。雙唐碑館の雙唐碑とは清翊が蔵していた二つの唐の墓誌すなわち高福墓誌と張希古墓誌に由来するのであろう。これら

墓誌については後述する。

『集蓼集』によると羅振玉の家には蔵書がなく、淮安には書肆もないので、周田の蔵書家から本を借りて読んだのだが、その一人に清翊が挙げられている。「年譜」はこのことを光緒十年（一八八四）に繫年しており、おそらくこの時期以前に蔣黼一家は淮安に住んだと考えてよいであろう。『唐王子安集注』が編纂されたのもまた淮安でのことであろう。それゆえ羅振玉が墓誌銘で蔣黼とのつき合いを二十年に垂んとする、と記してはいるが、両者の交友はもつと早かつたと言えよう。雙唐碑閣というように蔣家には金石があつたことがわかるが、『行年録』十六頁によると、清翊は『金石学録』に名が見える胡義贊と親しく、ために貨幣の精品を蔵したという。また羅振玉の『淮陰金石僅存録補遺』（『全集』五編第一冊）「高福墓誌」によると、光緒癸巳（一八九三）に羅振玉は覲辰が打拓した高福墓誌の拓本を贈られた、と記している。羅継祖は覲辰を蔣黼の初字とするが、あるいはこの時期には覲辰の字を用いていたのであろうか。それとも羅振玉は昔を懐かしんで覲辰と記したのであろうか。このような蔣家であつたから、相応の資産があつたわけで、『行年録』十五頁には光緒二十二年（一八九五）に羅家は貧しい家計のために越河の腴田百畝を呉県の蔣氏に質入れしたとあり、この蔣氏は『集蓼集』によれば蔣黼となっている。この時期、既に清翊は亡くなつていたのであろう。

以上のように、蔣黼の家と羅振玉は一八九〇年代には親しい関係にあつたことが理解できよう。ここで蔣清翊の学問についてももう少しふ



れておくことにしたい。『唐王子安集注』には「未完善述総目」という一葉があり、これには

緯学源流興廃考三卷、群緯釈文三十卷未脱稿、治原新譜八卷未脱稿、洪遵泉志集証證五卷、選錢叢四卷、憶夢寮藏錢墨影二十卷、投間録十卷、陳孔璋集輯存一卷、支道林集補遺一卷（支遁集補遺）已刻入徐氏叢書、任彦昇集註六卷、楊盈川集註二十卷、盧昇之集註六卷、略丞集註六卷、投間信筆一卷、擊筑吟一卷、憶夢詞一卷。

とある。『支遁集補遺』の刊行は前述したが、他の書籍が上梓されたかどうかは未詳である。蔣黼はこれら著述の完成に努めたのであろうけれど、刊行されることはなく、おそらくは原稿のままであったのであろう。そのようななかで、既に刊行された『唐王子安集注』は学術的にも重要なものであり、関西大学図書館内藤文庫蔵の同書の巻一表紙裏には、

共六本／癸卯六月仲三／清国呉県蔣伯斧所贈／炳卿

と墨書されている。すなわち光緒二十九年（一九〇三）に蔣黼から内藤湖南にこの書が贈られているのである。内藤湖南の『研幾小録』（『内藤湖南全集』巻七）の「富岡氏藏唐鈔王勃集残卷」には、

唐の王勃集の世に流布する者は、清の蔣敬臣が王子安集註より備はるはなし、是れ光緒癸未（明治十六年）の家刻本にして明治三十六年敬臣の子伯斧が我邦に來りし時余に贈られたり、

とあり、贈られた経緯がわかる。蔣黼の來日については未詳であるが、光緒二十九年（明治三十六年）には來日したのである。ともあれこの時期

には内藤湖南と蔣黼の交友は始まっていたのであった。

内藤文庫本の同書には内藤湖南のメモが付されており、

黑板博士所購手鑑屏風有／王勃集断簡与上野富岡神田三氏藏本云々

とある。『王子安集』は早く日本に伝わり、正倉院やその他に残本が伝わっているが、内藤湖南も関心をもち、このようなメモを残したのである。その後、宣統元年（一九〇九）、羅振玉が來日した折、彼は『王子安集』の佚文五編を集めて蔣黼に贈ったのであった。この点については前節でふれた『王子安集佚文』の羅振玉の序文や『行年録』七一頁に見えるところである。また明治四三年（一九一〇）、内藤湖南が訪中した折には蔣黼らに上野本と神田本を覆製した『唐王勃集残卷』を贈ったのであった。<sup>（註六）</sup>『王子安集』を通じて蔣黼と内藤湖南は結びついていったといえよう。

蔣黼は父の没後、淮安にあつて母に侍し学問に励んでいたのであるが、十九世紀末の中国の状況下にあつて、淮安にも様々な世の動きが伝わり、羅振玉・蔣黼ともに経世の志を持つようになるのは当然のことであろう。墓誌銘は農業を国家の根本と考えるようになり、二人は上海で学農社を興し、本富の術を講求したが、蔣黼は母親を慈しんで淮安に帰ってしまった、とする。以下、この間の二人の上海での活動について記すことにしたい。

上海での蔣黼と羅振玉の活動は学農社（務農会<sup>（註七）</sup>）と東文学社<sup>（註七）</sup>の動きに代表される。近年これらについて詳しい研究がなされるよう

になつてきたし、<sup>(註八)</sup>一八九六年に梁啓超らと『時務報』を上海で創刊した汪康年宛の書簡集である『汪康年師友書札』(以下『書札』)が出版されたことは、この時期の研究に重要な史料を提供している。

『書札』第三冊には蔣黼の汪康年宛書簡が八通、羅振玉のものが八一通も録されているが、羅振玉の第一信は一八九六年十月一日であり、『時務報』の創刊を知ったこと、汪康年や梁啓超の論を読み感激したことを記したうえで、三十歳の羅振玉は勢力の半ばを「經史考據」のなかに費やしてきたが、憬然と悟るところがあつたこと、しかし淮安という田舎にあつては二三の同志しかいないことをいい、次のように記したのであつた。

我輩日事空談、毫無实效、媿孰甚焉。昨與敵友蔣伯斧參軍議中国百事、皆非措大刀所能為、惟振興農學事、則中人之產、便可試行。蔣君忻然、急欲試弁、而購買機器、聘請農師、及仿行日本鉄棒打井等法、非託諸東人西人不可。茲專誠投前、擬先与尊館繙訳古城君議之、若西方學者、閣下交遊中定不乏人、尚乞一言為介、俾得有成。至此事拳弁細章、仍乞示以指南、無任禱企。蔣君当今志士、与弟夙好、每次尊報出、輒誦之擊節、讚歎不已、傾倒有素、敢為作縁、專此奉申、一切詳細由蔣君縷陳。

ここでは日頃の空談は実効性のないことをいい、蔣黼との議論で農學を振興することに思い至り、蔣黼とともに様々な計画をしていること等を記して汪康年に指南を乞うているのである。そして蔣黼は当今の志士であり、委細は蔣黼から縷陳するという。これは羅振玉の書簡で

あるが、蔣黼の考えも全く同じであつたと考えられよう。父親の著作を完成させようとしていた蔣黼にしても、金石学等に没頭していた羅振玉にしても、『時務報』などで知らされる新しい動き、清末の状況を見聞するにつけ、三十歳の二人は「經史考據」の学に代わつて農學に注目したのであつた。

羅振玉・蔣黼が上海で発刊した光緒丁酉(一八九七)三月の梁啓超の序文のある『農學報』第一冊末尾の「農會博議」には、丙辰(一八九六)の冬に二人は農會の議を唱えて上海にいたり、汪康年に質問したことが見える。ところが『集寥編』、『行年録』、『憶略』は皆な一八九六年の春のこととしている。大川俊隆の指摘のように、<sup>(註九)</sup>前掲の『書札』や『農學報』の記事からすれば、冬のことといえよう。

羅振玉の汪康年宛書簡第一信が出されて一ヶ月後の、一八九六年十一月の『時務報』第十三冊には羅振玉・蔣黼らの「務農會公啓」が掲載されており、そこには務農會(學農社)の目的などが記されており、「捐款姓氏」として羅振玉と蔣黼がそれぞれ「捐銀千元」とあつて、財政的には二人に負うてることがわかる。また『時務報』第二二冊(一八九七年三月)の「農會報館略例」中の「弁事規條」には「本館設理事二人。一総理庶事、一潤色書報」とあつて、『行年録』一七頁に「自任筆削除、伯斧総庶務」とあることに従えば、羅振玉が編集、蔣黼が庶務經理という役割分担であつた。

後述のように蔣黼は一八九八年に淮安に帰つてしまい、『農學報』出版からは離れるが、『農學報』は光緒三十二年(一九〇五)年まで続き、

三百十五冊が刊行され、農業関係の翻訳や著作が掲載されたのであり、また『農学报』をもとに『農学叢書』『農学叢刻』が出版されたのであった。一方、羅振玉・蔣黼はまた上海で中国最初の日本語学校というべき東文学社を一九〇八年に開校した。

東文学社がいつ開校したかは明確ではないが、『農学报』出版の過程で日本語のできる人物を養成する必要が認識され、開校の運びになったのであろう。『農学报』第十四冊（一九〇七年十月）には蔣黼・羅振玉・邱憲ら五名の「東文学社社章」があつて設立の趣旨が述べられている。『集蓼編』によれば藤田豊八が教務に任じ、羅振玉と蔣黼は務農会の事業で多忙なので、邱憲が校務に任じ、田岡嶺雲や船津辰一郎らが教員であつた。東文学社からは王国維らが輩出したが、『行年録』によれば一九〇年には閉校したようである。

一八九八年、戊戌の変法が失敗し、務農会に関わる蔣黼の立場に変化が生じる。墓誌銘では「年を逾えずして、母を恋うるを以て帰る」と、蔣黼が淮安に帰り、務農会や東文学社から離れたことを簡単に記している。この間の経緯について『集蓼編』、『行年録』では、朝旨によつて学会や報館が禁止され上海の志士たちも雨散したが、『農学报』は查封されていず、蔣黼と相談したところ、彼は自ら閉館散会することを主張した。しかし支払うべき印刷費を欠き、閉館することはできない状況であつた。結局、上海道台に二千元を交付してもらうことになったが、年末に羅振玉が淮安から上海に帰つたところ、蔣黼はこれを印刷費に充ててしまい、一銭ものこらず、彼は「時危に感じ、淮安

に帰り母を奉」じたのであつた。以後、羅振玉は借金して『農学报』を継続し、彼一人の出版物になつたのであつた。また東文学社に関しては『書札』の羅振玉の第十一信（一九〇八年十二月十七日収）には、蔣黼は江南製造局の広方言館に帰属させようと考へていたが自分の願うところではない、としている。ともあれ一九〇八年末には、蔣黼は『農学报』や東文学社からは離れ、淮安に帰つてしまつたのであつた。<sup>(註二)</sup>尚、後述のように、光緒二十五年（一八九九）、訪中した内藤湖南は羅振玉と会い、金石を話題とし、拓本を交換している。

#### 四

淮安に帰つた後の蔣黼について詳しいことは未詳である。墓誌銘に見えるように、その後も羅振玉と行動をともしたことが多かつたとは推測しえよう。そこでまづ羅振玉について簡単にみて行くことにする。

光緒二十六年（一九〇〇）、湖広総督の張之洞の要請によつて湖北農務局総理兼学堂監督となり、学農社を沈紘に委託した。翌二七年、武昌農学校を経営し、十一月から翌年の一月まで来日して教育について調査した。二八年、南洋公学校長となる。二九年、正月に母が亡くなり淮安に帰り、十一月には両広総督の岑春煊の招きで広東に行き、年末に上海に帰つた。三十年、再び広東に行き三月に上海に戻り、七月に

は江蘇巡撫であつた端方の要請で学務を参議し江蘇師範学堂を創立した。三一年、父が上海で没したので淮安へ戻つた。三二年、端方の招きで新設の学部<sup>二</sup>に調査され家族と北京へ移つた。三四年、留学生殿試<sup>三</sup>襄校官となつた。宣統元年（一九〇九）、張之洞が奏補して農科大学監督になり、五月に農学調査のために来日し、この折、内藤湖南、狩野直喜、富岡謙蔵らと会つてゐる。この間、羅振玉は農学を中心とする公務とともに各種文物の保存、敦煌出土文物の研究、甲骨や金石等の研究に従つてゐた。

では一方の蔣黼はどうであつたか。墓誌銘では淮安に帰つて数年後、「入資して郎となるも、然るに以て仕えず、廃養は仍お初志なり」という状況であつた。「入資」を『憶略』一五四頁は「入貲」としており、<sup>二</sup> 捐納で郎官の資格を得、仕えることなく初志通りに母親を養つていたのであつた。『吳県志』には「粵督岑春煊蘇撫端方、先後礼聘入幕費、襄政務佐治著績」とあり、岑春煊、端方が蔣黼を招聘し、勤務成績が良かったというのである。羅振玉の経歴と重ね合わせると、光緒二九年から三〇年に重なることになる。墓誌銘の「予、粵中に客たりしとき、吳下に客たりしとき、皆な君と偕にし」であつた。おそらく二九年の正月に羅振玉が淮安に帰つたとき、蔣黼に会い、その後、羅振玉の手づるもあつて岑春煊や端方の幕下にあつたのであろう。高福墓誌は蔣黼から収蔵家でもあつた端方に渡つたので、<sup>三</sup> あるいはこのよう<sup>二</sup>な人事に関連しているのかもしれない。尚、先述のように蔣黼は二九年には来日しており、六月に内藤湖南と会い『唐王子安集注』を贈つて

いるのである。

光緒三二年、羅振玉は北京に移るが、蔣黼も遅れて北京に移つたと推測し得よう。墓誌銘は、学部ができる<sup>二</sup>と蔣黼を尚書蒙古采公に推薦したという。『吳県志』によれば采公とは采慶のことで、采慶の奏請によつて二等諮議官として学部に入つたという。『行年録』によれば羅振玉と同じく三二年のことである。その後、墓誌銘にあるように京師大学堂では六書倉雅の学つまり小学を教授したこともあつた。北京での蔣黼は羅振玉とともに古書の校勘や敦煌石室の文書の研究に打ち込んでゐる。この書の刊記は二月とあるが、蔣黼の跋文は三月であることよりすると、三月には北京に来ていたといえよう。既述のようにこの時期、蔣黼は羅振玉の家に同居したのであつた。

宣統二年（一九一〇）九月から十月にかけて、内藤湖南は狩野直喜や富岡謙蔵らと北京に派遣され、この折、羅振玉や蔣黼と会つてゐる。先述のように、内藤湖南が蔣黼に『唐王勃集残卷』を贈つたのはこの折のことであろう。またこの訪中時、内藤湖南は張希古墓誌の拓本を蔣黼から贈られてゐる。<sup>四</sup> 幸いなことに関西大学図書館内藤文庫には『宝熙羅振玉蔣斧等書冊』があり、二三・七×一四・五の板表紙の折り帖である。これには宝熙、喬樹柅、林灝深、羅振玉、蔣黼の五人の揮毫が見える。蔣黼のものは、

在昔金人東降、煥慧炬於閭浮、白馬西来、布慈雲於震旦、頭公求

道越熱風毒霧之鄉、玄奘尋真歷八水雙林之対竟云々

旧作一首録呈

炳卿先生郢政宣統庚戌重九吳興蔣斧

とある。宝熙の揮毫も「庚戌秋日書」とあり、林灝深も「宣統二年九月書」とあるので、九月九日重陽の日に五人で内藤湖南らを囲んだときのものであろう。

蔣黼の没年時の官職は墓誌銘にあるように「誥授奉政大夫学部候補郎中二等諮議官」であった。奉政大夫は追贈であらう。

蔣黼の正室は陳氏で、継室は程氏、側室は某氏、子供には恵まれず女子一人であったため、弟克己の子慰祖が継いだという。

墓誌銘に「性顧た儒緩、著述は矜慎、屬草多く半ばに及ばず。余毎に以て君を督するも、輒ち遜謝して改むる能わず。故に卒に成書なし」とあるように、蔣黼はおとなしい性格で著述に際しては慎み深く、草稿は半分もできず、羅振玉が常に促しても改まらず、結局のところ成書はないという。著述はないといっても既述の蔣斧の名で知られる書名があるので、最後にこれらについて記しておくとともに、『吳興志』や『書信』、そして『金石学録続補』の蔣黼の伝に見えるものを挙げておくことにしたい。

確かに蔣黼の名で刊行されたものはないようで、既に小稿の(註一)に記したように、羅振玉は『沙州文録』一卷を蔣斧輯という形で、一九二四年に羅氏編印として刊行したのであった。しかし蔣斧の名の見えるものは『敦煌石室遺書』(全集三編第六冊)にいくつもあり、それらは、

『尚書顧命殘本』

蔣斧の按語あり

『沙州文録』

既述

『般若波羅密多心經』

蔣斧の跋文あり

『五台山聖境讚』

蔣斧の跋文あり

『化胡経軼文』

蔣斧の按語あり

『魔尼経』

蔣斧録 蔣斧の按語あり

というものである。これらは羅振玉の敦煌文書研究を蔣黼がかなり手伝っていたことを示していると言えよう。また跋文のあるものとしては既に『王無功集』を挙げたが、この他に、

『粵東詞八蚕法』

蔣斧輯 『農学叢書』第一七冊

『蚕桑答問続編』

蔣斧輯 『農学叢刊』所収

がともに蔣斧の名である。これらは『農学报』に掲載されたものであろう。

『吳興志』の蔣黼の列伝は羅振玉の墓誌銘によつたとするのであるが、墓誌銘に比べるとかなり短文である。しかし以下のような著作を挙げている。

中国教育史四卷、中国貨幣史十卷、統説文古籀補四卷、説許札記

二卷、古今文集説二十卷、韻移金石跋尾二卷、己学菴叢稿四卷、

北窗韻語三卷、東游日記一卷。

以上であるが、『書信』の蔣黼の伝もこれらを挙げており、『古今文集説』を『古今説文集説』と、『説許札記』を『統許札記』と、『己学菴叢稿』を『己学菴叢稿』としている。一方、『金石学録続補』では『中

『国貨幣史』があつて、六国の貨幣の源流の分析に詳しいという。蔣輔の生涯を考えると以上のような著作があつてもおかしくはないが、刊本としては存在しなかつたようである。『書信』は『吳県志』によつてあるといえるので、『吳県志』編纂の折にはこれら著作に関わる資料が存在したのであろう。

五

以上、蔣輔を中心に羅振玉と内藤湖南との交友について述べてきた。辛亥革命前後の蔣輔については調査すべき資料が多くあると思われるが、この点については識者の教示を仰ぐとともに今後の課題としたい。蔣輔と羅振玉は同年の生まれで且つ同郷であり、その足跡には重なる部分が多く、農学にしても文物にしても、関心を示した学問領域は同じであり、羅振玉も蔣輔を常に配慮していた。羅振玉にとつてはいわば同志的な存在であつたといえよう。羅振玉の残した多くの業績からすれば、蔣輔は忘れられがちな存在ではあるが、羅振玉の影に常に蔣輔がいたことを忘れてはなるまい。

内藤湖南は明治三十二年（一八九九）に訪中し、この折の記録を「禹域鴻爪記」（『燕山楚水』所収 『内藤湖南全集』巻二）に残しており、十一月に羅振玉にあつたときのことを、

吾は携へ来し、延曆敕定印のある右軍草書、法隆寺金堂釈迦仏、

及び薬師仏光焰背銘（中略）、神護寺鐘銘諸拓本、風信状、小野道風国字帖等を贈り、羅は秦瓦量、漢戴母墓画像、漢周公輔成王画像、北齊張氏白玉象、唐張希古墓誌銘、及び高延福墓誌銘、（中略）及び無年号甌、宋元嘉甌等の拓本を以て之に報じたり、蓋し此等諸本は、文字盡く精善なるに非ざるも、皆人家に蔵弄して、市肆間の購求すべき者に非ずと。

と記している。高延福とは高福のこと、内藤湖南は羅振玉から蔣輔の家にあつた高福墓誌や張希古墓誌の拓本を贈られたわけである。内藤湖南旧蔵の拓本は現在、京都大学人文科学研究所に蔵されており、前者については中田勇次郎編『中国墓誌精華』（昭和五〇年 中央公論社）に内藤湖南旧蔵拓本として紹介されている。とすれば張希古墓誌の拓本や、そして（蔣輔墓誌銘）の影印も人文科学研究所に蔵されているかもしれない。<sup>（註四）</sup>一方、関西大学図書館内藤文庫の蔵書を精査すれば、蔣輔、羅振玉に関わる新たな資料が見いだせるかもしれない。とにも今後の課題としたい。

筆者が（蔣輔墓誌銘）の影印を入手した折、購入した拓本のなかに、実は前掲の高福墓誌と張希古墓誌の拓本があつた。これら三者は一緒にコレクターや古書肆のあいだを動いていたと推測されよう。奇縁といふべきであろう。入手の際、筆者に（蔣輔墓誌銘）の影印を快く譲ってくれた長友伊藤隆夫氏に感謝したい。

墓誌銘の影印の存在については既に平成二年八月五日、京都の思文閣美術館で開催された第十二回書論研究会大会のパネル・ディスカッ

シヨン「近代日中書法交流史への展望」で報告し、本年八月九日、同所で開催された第二十回書論研究会大会での研究発表「藤野海南と黎庶昌」で言及し、同時に開催された特別展示「羅振玉とその交友」に展示した。

註

- (註一) 「憶略」八頁には、蔣輔は著作をみな完成することができなかったの  
で、羅振玉は蔣輔のために「沙州文録」二巻を刊行したとする。「甲子  
仲冬上虞／羅氏編印」の「沙州文録」一巻補遺一巻付録一巻」は宣統元  
年九月の「吳県蔣斧記」の「沙州文録序目」があり、本文は「吳県蔣  
斧輯」である。「憶略」はこの書のことをいっており、羅振玉は一九二  
四年に羅氏編印として刊行したことになる。この書で蔣輔は蔣斧と  
なっており、蔣斧は蔣輔の筆名とみることができ、蔣斧の筆名のもの  
は後掲のようにいくつかわかれる。尚、「全集」四編第十二冊の「沙集  
文録」は補遺一巻と付録一巻を影印しており、蔣斧輯の「沙輯文録」  
一巻はのぞかれています。しかし蔣斧輯「沙州文録」は「全集」第三編  
第六冊の「敦煌石室遺書」には録されている。
- (註二) 正確にいうならば、吳県（蘇州）は吳県と長洲県からなり、雍正三  
年に長洲県から元和県を分置した。蔣輔の家は元和県に属している。
- (註三) 「永豊郷人行年録」は初版が南京で一九八〇年に刊行され、ついで台  
北で再版され、一九九〇年に日本の中文出版社から増補版が出版され  
て、これが定本とされる。
- (註四) この他、花岡千春「羅恭敏公正伝」（油印本 昭和十七年）や陳邦直  
「羅振玉伝」（満日文化協会 康徳十年）などがある。
- (註五) 内藤湖南が金石に書丹するに際して用意があったことについては、  
鐘銘の例であるが、石田肇・鈴木勉「内藤湖南書丹の龍源寺鐘銘につ  
いて」（『書論』第二二号 昭和五八年）参照。
- (註六) 前掲内藤湖南「富岡氏唐鈔王勃集殘卷」参照。尚、複製本には明治  
四三年八月の内藤湖南の跋文がある。
- (註七) 羅振玉は墓誌銘や「集寥編」では字農社と記すが、務農会と実態は  
同じである。
- (註八) 邦文のものをあげておく。深澤秀男「変法運動と農字報」（科研費報  
告書「中国史における中央政治と地方社会」 昭和六一年）、大川俊隆  
「上海時代の羅振玉―『農字報』を中心として―」（産研叢書一「国際  
都市上海」 大阪産業大学産業研究所 一九九五年）、錢鶴「羅振玉・  
王国維と明治日本学会との出会い―『農字報』・東文学社時代をめぐっ  
て―」（『中国文学報』第五五冊 一九九七年）。
- (註九) 前掲大川論文二〇七頁参照。尚、「農字報」の完本は日本にはないよ  
うで、大川によれば上海図書館にあるのみとの由。小稿でも「農字報」  
については大川論文によるところが多い。
- (註一〇) 前掲大川論文二三四頁参照。
- (註一一) 小稿では蔣輔・羅振玉を政治的にどう評価するかふれる必要はな  
いが、前掲大川が二四一頁で「羅振玉は、戊戌の政変に伴う『農字報』  
や東文学社の危機を乗り切ることができたのであるが、それは多分、  
羅氏にとっては大きな「転身」を伴うものであった」と指摘している  
ことに注目したい。
- (註一二) 端方「陶齋藏石記」（宣統元年一九〇九）巻二に高福墓誌がある。  
王壮弘「増補校碑隨筆」（上海古籍出版社 一九八一年）参照。内藤湖  
南「隼人石と十二支神象に就きて」（『読史叢録』所収 『内藤湖南全  
集』巻七）によると、明治四三年（一九一〇）十月、北京で蔣輔に誌  
側の十二支の模様を拓した高福墓誌の拓本を依頼したところ、後日贈  
られたのは張希古墓誌であったという。内藤湖南が依頼すべきであつ  
た拓本は張希古墓誌であつたゆえ、結果的にはこれでよかつたのであ  
るが、この時期には高福墓誌は端方の所蔵となっていたのである。
- (註一三) 前註一二参照。
- (註一四) 内藤湖南が高福墓誌の拓本をいくつか持っていたことは前掲「隼  
人石と十二支神象に就きて」に見え、（註一一）をふまえれば、張希古

墓誌の拓本を二枚持っていたことになる。

(付記) 小稿は平成十年度科学研究費基盤研究(C)による研究成果の一部である。

関西大学図書館では内藤文庫閲覧の便宜を得た。関係各位に感謝したい。

(戊寅九月一日稿)

(追記) 小稿投稿後、銭鷗「羅振玉における『新学』と『経世』」(『言語文化』第一卷第一号 一九八八年七月)の存在を知った。関連文献として追記する。

(戊寅十二月二三日)